

海浜観光地の衰退と再生：東京湾を事例として

高山 陽子

Decline and Rejuvenation of Coastal Tourist Sites: A Case of Tokyo Bay

Yoko TAKAYAMA

はしがき

本稿は、大森地域¹を事例として海浜観光地の発展と衰退、再生について考察することを目的とする【図1】。海浜観光地の発展と衰退に関する研究は、海浜リゾート発祥の地であるイギリスにおいて蓄積されてきた。健康増進の観点から日光浴と海水浴が推進された18世紀のイギリスでは、南部のブライトンが海浜観光地として開け、上流階級の人々に賑わった。19世紀にロンドンとブライトン間の鉄道が開通すると、中産階級や労働者階級など様々な階級の人々が訪れるようになったことで、ブ



図1 関連地図

¹ 本稿で扱う大森地域は、大森（現、大森本町）、入新井（現、大森北）、八幡（大森北および大森本町）、森ヶ崎（現、大森南）を指す。大森は1878年に発足した荏原郡（現、大田区・品川区・目黒区・世田谷区の一部）に含まれた。1932年、荏原郡が東京市に合併され、大森区と蒲田区となる。1947年、大森区と蒲田区が合併して大田区となり、1954年、京浜急行大森海岸駅の住所は大田区から品川区南大井となった。

ライントンは急速に大衆化し衰退した。20世紀後半、ブライトンはイースト・サセックス州の取り組みによって古い建物を残しつつ、宅地化を進め、レトロな雰囲気のある海浜リゾート地として復活したが【写真1】、ブラックプールやリールなどの他の海浜リゾート地は1970年頃をピークとして観光客が減少し、現在でも不況にあえいでいる。



写真1 ブライトン（2015年9月撮影）

こうした観光地の発展と衰退、再生について Butler (1980) は TALC (観光地ライフサイクル、Tourism Area Life Cycle) という形でモデル化した。観光地は収容人数超過などの臨界を迎えると停滞し、その後、再生する場合と衰退する場合があるとした。

東京最初の海水浴場として繁盛した大森地域は、都市近郊の海浜観光地という特徴を持つ。京浜電気鉄道の開通によってさらに羽田や新子安、扇町などの海水浴場が開けていったが、20世紀初頭から川崎に工場が立ち始め、埋立と運河開削が進んだことから、東京湾の環境は次第

に悪化した。1960年代の埋立て大森を含む東京湾の多くの海水浴場は消滅し、その後、1970年代後半から海浜公園として整備されていった。同様の事例は、伊勢湾の四日市や大阪湾の浜寺、播磨灘の高砂などでも見られる。埋立による海水浴場の消滅は、TALCに照らし合わせると、どのように位置づけられるのか。本稿では、従来の海浜観光研究を整理した上で、海浜観光をリゾート型とアトラクション型に分類し、アトラクション型の海浜観光地における発展から衰退、再生までの経緯をたどりながら、東京湾の海浜観光の衰退と再生の特徴を明らかにする²。

第1節 海浜観光研究の系譜

観光は主に、神社仏閣や宮殿などの建造物、古い家屋の残る街並みを資源とする文化観光、大自然の美しさや生物多様性を資源とするエコツーリズム（自然観光）、マイノリティの歴史や文化を資源とする民族観光、テーマパークやリゾート地などを資源とするレジャー観光に分けられる。著名な文化観光および自然観光の資源は世界遺産に登録されており、民族観光の資源は無形文化遺産に記載されていることが多い。また、これらの資源は、世界遺産に登録されていなくても、それぞれの国や地域で文化財や自然公園として保護され、その周辺に商業施設を建てることは原則的に禁止されている。それに対して海浜観光地は、日本では「白砂青松」、東南アジア島嶼部やオセアニアでは「地上のパラダイス」と形容される。こうした場所は観光資源と見なされ、周辺にホテルや飲食店、娯楽施設が立ち並ぶ。最初は穏やかに進む開発は、やがて加速し、過剰な商業施設の建設や性風俗産店の増加による景観の悪化を招く。また、ホテルや飲食店などの乱立を抑えた場合でも収容人数を越え、結局は観光客が離れていく。さらに、古くからある海浜観光地は施設の老朽化や陳腐化が目立ち始め、やがては衰退してゆく。

このようにリゾート地で起こりうる観光地の発展と衰退についてモデル化したのがButler（1980）である。Butlerは、発展から衰退、再生に関するモデルをTALCとして以下のように説明した【図2】。最初に観光地としての潜在性を見出された地域には観光客というよりも個人旅行者が訪れていたが、やがて、旅行者が増えてくるとその地域住民が旅行者用の宿泊施設などを整備し、観光地化が進んでいく。さらに観光化が進むと収容人数超過という臨界状態となり、観光地として停滞や衰退を迎えることになる。衰退から再生するか否かは、その場所

が本来持っている資源に基づく。TALCの論考は短いものでありながらも、その後の人文地理学的な観光研究に大きな影響を与えた³。観光地は発展から衰退／再生に至るといふ共通理解が得られてきたが、1980年代の観光地の多くは発展段階にあったことから、衰退と再生に関しては事例も議論も十分ではなかった。

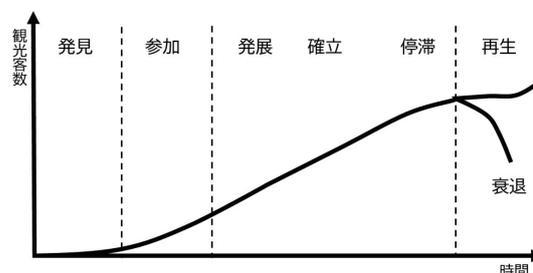


図2 TALCモデル（筆者加筆）

観光地の衰退に関する事例および理論研究として主な対象とされたのは、イギリスの海浜リゾート地であった⁴。社会学的観光研究の古典となった『観光のまなざし』（1990）において、Urryはイギリス南部のブライトンを取り上げ、産業革命後、労働階級の人々が海浜リゾート地へ出かけるようになったことで海浜観光地の大衆化と衰退をもたらしたという経過を、まなざしという視点から論じた⁵。近代化と海浜リゾート地について、Smithは、海浜観光の発展は都市化の一形態であり、海浜地の都市化は世界中で展開する現象だと指摘した⁶。ブライトンやブラックプールなど、イギリス海浜リゾート地の衰退は1960年代から目立ち始めた。その理由は、低価格・短期滞在者の成長、国内マーケットの縮小、国内外の非リゾート地・国外リゾート地との競争、長期から短期休暇マーケットへの移行の難しさ、海外観光客に対する宣伝の少なさ、施設の老朽化、情報の少なさ、不便な交通、熟練スタッフの少なさ、限られた資本など多岐に及ぶ⁷。

Agarwalは一連の研究の中で、イギリスの海浜リゾート地の衰退について、ポスト・フォーディズムという側面から説明を行っている。ポスト・フォーディズムの時

³ Priestley, G, and L. Mundet (1998)、Andoriotis(2006)、Smith, A. R. and J. C. Henderson (2008) など

⁴ Shaw and Williams (eds.) (1997)、Gale (2007)、Farr (2017) など

⁵ Urry (1990)、アーリ (1995)

⁶ Smith (1992) 304.

⁷ Cooper (1997)

² 本稿では常用漢字に改めて表記する。

代においては、観光客は画一的なパッケージツアーではなく、自身でカスタマイズできるような個人旅行を好むようになる。それゆえ、産業革命の進展と軌を一にして発展してきた海浜リゾート観光は、観光客の好みに合致しない流行遅れと見なされる。衰退した海浜リゾート地が再生する可能性は十分にあるものの、テーマパークなどの新たな観光形態や、競合する観光地との差異をいかに図るかが重要であるという⁸。

2006年、TALCを再考した論集がButlerによって編集された⁹。本論集においてLagiewskiは、1981年から2002年までのTALCに関する論文49本の一覧を示した¹⁰。49本のうち、事例研究39本で、そのうち海浜リゾート地に関する論文が23本、理論研究が10本であった。TALCはリゾート地に限定したモデルではないにも関わらず、リゾート地の事例が多いのは、海浜観光が文化観光やエコツーリズムのような観光資源の持続可能性を前提とする観光と異なり、リゾートホテルや飲食店、遊具など人為的な建造物と白い砂浜という自然景観の融合を条件とするためである。白い砂浜にリゾートホテルやコテージを建設できるような場所が、「地上のパラダイス」と見なされ、観光開発の対象となる。その代表例はタイ南部のアンダマン諸島である。

ヨーロッパ北部におけるリゾート地の衰退に反比例するかのように、アンダマン諸島のビーチには1970年代、欧米からバックパッカーが押し寄せた¹¹。「地上のパラ

⁸ Agarawal(1999, 2002, 2006)、Gale(2007)は、イギリス以外のヨーロッパ北部(フランス北部、ベルギー、オランダ、デンマークなど)における海浜リゾート地の衰退理由として、①ラブベガスのようなハイパーリアルな視覚文化の台頭、②ケーブルテレビなどの刹那的な時間の出現、③消費を通じた自己表現の出現、④ポスト・フォードイズムにおける消費と生産の再編、⑤グローバル化への反発を挙げている。

⁹ Butler(2006)

¹⁰ Lagiewski(2006)

¹¹ Westerhausen(2002)

ダイス」として開発されてきたビーチは、1980年代半ば以降の急速な商業化によって観光客が減少した。この現象はしばしば失樂園と表現された。1990年代に入るとさらに環境は悪化し、このままではいつか大きな被害が出るのが警告されていた頃に、インド洋津波がアンダマン諸島を襲った。2004年12月26日、津波によって外国人観光客約2000人を含む8000人以上の犠牲者を出し、多くの建物を呑み込んだ。しかし、津波はアンダマン諸島のビーチから砂浜と一緒にゴミを持ち去ったことで、ビーチは観光開発前の状態に戻った。

Cohenは、新聞などの報道を手掛かりとして、アンダマン諸島の復興を論じた。被災後、津波によって人工建造物が流され、ビーチが信じられないほど美しくなったと様々なメディアが報じた。また、被災後の2005年は観光客が激減したこともビーチが自然の状態であり続ける一因でもあった。当時、タクシン首相は、被災地の復興を規制し、自然景観を回復させることを目指した。自然環境を重視した再生計画はコンクリートの建造物を排除するものであり、実現すれば、とりわけビービー島の観光業は大打撃を受けるとされた。結局、環境重視の再生計画は実施されず、2006年には被災前のビーチの状態に戻った。この事例をCohenは、「パラダイス・サイクル」と呼び、TALCが長期的のモデルであるのに対して、「パラダイス・サイクル」はTALCに内在する再生の短期的モデルであると述べた。アンダマン諸島では、タイ政府や地方機関、事業家、NGO、環境活動家などの多彩なアクターが関わりながら再生が進んだ点で、東南アジア的なリゾート開発の特性があるという¹²。

20世紀後半のグローバリズムの中でリゾート地として開発されたアンダマン諸島と、18世紀後半の産業革命の中でリゾート地として開発されたイギリスの海浜リゾート地は、ともに海浜リゾート地であるものの、成立過程において大きな違いがある。そこで、本稿では、都市近郊にある海浜観光地をアトラクション型と呼び、東

¹² Cohen(2008)

表1 海浜観光地の分類

	リゾート型	アトラクション型
場所	主に旧植民地(東南アジアなど)	先進国の大都市近郊
客層	国内外の富裕層、バックパッカー	国内の労働者・中産階級
施設	リゾートホテル、コテージ	飲食店、脱衣所
滞在	長期滞在	日帰り、短期滞在
運営	グローバル資本、インフォーマル・セクター、	大手資本(鉄道会社・新聞社など)
衰退理由	環境悪化、イメージの悪化	陳腐化、老朽化
代表例	プーケット、バリ	ブライトン、ユニーアイランド

南アジアなどの南国リゾート地をリゾート型と呼ぶ【表1】。大都市近郊のアトラクション型は国内の労働者・中産階級向けであるのに対して、リゾート型は国内外の富裕層や欧米からのバックパッカーを対象とする。また、運営面では、リゾート型ではグローバル資本が入っていると同時に、露店などのインフォーマル・セクターも広く見られる。衰退理由としては、リゾート型では乱開発に伴うイメージの悪化、アトラクション型では老朽化による陳腐化や流行遅れなどが挙げられる。以下では、リゾート型として開発された大磯と、アトラクション型として発展していったその他の日本の海水浴場の展開を整理してゆく。

第2節 日本における海水浴の展開

日本最初の海水浴場については諸説ある。例えば、古くから潮湯治が行われていた知多半島の犬山は「世界最古の海水浴場 犬山海岸」¹³と宣伝され、1880年に開かれた沙美海水浴場は、「日本最古といわれる海水浴場」¹⁴と記される。日本の海水浴について総括的に論じた畔柳¹⁵によると、近代的な海水浴場の開設は、1885年の大磯（照ヶ崎海岸）が最初である。軍医の松本良順（1832-1907）は、『海水浴法概説』の冒頭で、「海水浴ハ能ク疾病ヲ治スル」¹⁶として、海水浴を広めるために日本中で海水浴場に適した海岸を探した結果、最終的に大磯が適する場所であるとした。1887年、東海道本線の大磯停車場が設置されると、旅館の椿龍館の開業などで海水浴場として開発されていった。伊藤博文や大隈重信、陸奥宗光¹⁷、西園寺公望らが別荘を構えたことで、一大避暑地となった大磯は「政界の奥座敷」と呼ばれた。

1922年刊行の『大磯案内』では、大磯が高級リゾート地として開けていった様子が記されている。

海水浴の開けた初は、貴顕富豪の間に盛に流行した。其の時は未だ別荘の設は無かつたから、皆旅館に入来つて、金銭を土芥の如く撒散らして、綏を尽し豪を極めた。其の結果皆旅館に於ては、膳部は美味に、器物は高尚に、絹布を寝具に敷き、金屏風を座敷に立てた。随つて世間では、大磯は上等社会の遊ぶ所で、中以下の行く所でない

いなど悪評を立てた。されど今は旅館も省みる所があつて、広く遊覧地の状況を視察して、客の待遇方に大いに改良を加へ、懇切と軽便とを主とするに至つた…¹⁸。

海水浴場は日本各地に広がっていった。大阪湾では古くから白砂青松の地として知られていた浜寺が海水浴場となった【写真2】。明治初期の新田開発によって、多くの松の木が伐採されると、1873年、この地を訪れた大久保利通がその様子を見て、すぐに伐採をやめるように指示を出した。これが、浜寺公園への設置へとつながった¹⁹。浜寺公園で最も古い料亭²⁰である海浜院は、1890年頃、潮湯を主とする保養所として、府知事や大阪病院長らによって設置された。後に経営を任された堺の仁井田裕次郎（出生年不明）は建物の模様替えを行い、海水温泉を名物とした海浜館を繁盛させた。その後、海浜院を真似た寿命館や川芳などの立派な料亭が建った²¹。浜寺公園の中央に位置した一力楼は、「諸楼中の巨擘にして築造の壮大華麗なる稀に見る所なり二層の大楼浜頭に横はり瓦葺高く松梢を抜く…明治三十一年三月の創設に属し客室五十三外に別室九あり」²²とあり、大規模な宿泊施設があったことがわかる。

1897年開設の南海鉄道浜寺駅は、1907年、浜寺公園駅と改名され、同時に新駅舎は辰野金吾によって設計された。海水浴場は1905年、南海鉄道によって設置されたが、来場者数が伸び悩んだため、大阪毎日新聞が海水浴の宣伝を担当するという協力関係が築かれた。他方、1912年



写真2 旧浜寺海水浴場（2025年7月撮影）

¹³ 愛知県常滑市公式観光サイト

¹⁴ 岡山観光WEB

¹⁵ 畔柳（2010）

¹⁶ 松本（1886）

¹⁷ 2024年、明治記念大磯邸園として旧古河別邸及び陸奥宗光別邸が一般公開された。隣接する伊藤博文別邸は2025年現在、大規模な改修工事が行われている。

¹⁸ 朝倉（1922）23.

¹⁹ 服部（1903）42-47.

²⁰ 以下、本稿では料亭旅館を料亭と記す。

²¹ 荒木（1926）8-9.

²² 服部（1903）44.

に開通した阪堺電気軌道浜寺駅前駅については大阪朝日新聞が宣伝を担った。こうして浜寺は「東洋一の海水浴場」と呼ばれるほどの海浜観光地となった²³。



写真3 旧香櫨園海水浴場（2025年6月撮影）

大磯がリゾート型の高級路線であったのに対して、私鉄各社が開発に乗り出した海水浴場は庶民的なアトラクション型であった。大阪湾、播磨灘、伊勢湾に海水浴場が設けられ、大阪や神戸、名古屋などから私鉄に乗った観光客が訪れる行楽地となった。

1893年設立の阪神電気鉄道は、コニーアイランドやブライトン、ブラックプールなどの海浜リゾートを参考に、大衆的なアーバン・リゾートとして香櫨園や甲子園の開発を進めた²⁴。阪神電気鉄道は、1905年に阪神本線を開通させると、沿線の打出に海水浴場を開設した。1906年、大阪毎日新聞が打出海水浴場の広告を担当し、集客イベントとして花火の打ち上げや、陸軍軍楽隊の演奏などを開催した。まもなくして、打出海水浴場では築堤の崩壊や小魚によるトラブルなどが発生し、さらに、大阪毎日新聞が浜寺海水浴場の宣伝に力点を置いたため、阪神電気鉄道は、打出浜海水浴場を廃止して、1907年、香櫨園浜海水浴場の開発を手掛けた【写真3】。1913年、遊園地の香櫨園（1907年開園）が廃園となっ

²³ 浜寺海水浴場は泉北臨海工業地帯建設のため1962年、閉鎖した。

²⁴ 今井・三宅（2024）ブルックリンの南端に位置するコニーアイランドやブライトン・ビーチ、マンハッタン・ビーチは、19世紀初めから富裕層向けのリゾート地となっていた。マンハッタン・ビーチの開発は鉄道王のAustin Corbyn（1827-1896）が行い、駅近くに高級ホテルを建設した。ブルックリン橋が開通すると、コニーアイランドにはルナパーク、ドリームランド、スティーブルチェース・パークといった遊園地が開園し、海浜リゾート地から遊園地へと変貌した。キャノン（1988）

た後、園内の施設が海水浴場に移設された。こうして海水浴が設置されたが、1908年の株主総会では今西林三郎（1852-1924）取締役によって誘致費用がかさむわりには利益が芳しくないという発言がなされた。さらに、景気に左右される娯楽施設よりも通勤通学の運賃収入を確保するほうが妥当であるとされた²⁵。

播磨灘では、兵庫電軌（現、山陽電気鉄道）が開発を担った。1910年、兵庫-須磨に開通した兵庫電軌の沿線には多くの海水浴場があり、1913年、境浜海水浴場が開設された。海水浴シーズンには臨時停留所が設けられた。1924年、明石中崎、東二見、高砂、八家赤壁の浦、白浜、飾磨などの海水浴場があったが、1930年代に八家赤壁の浦、飾磨、東二見、高砂海水浴場が消滅した一方で新舞子と須磨海水浴場が開設された。1949年頃から海水浴場が再開され、大阪湾の須磨海浜公園、須磨浜（須磨浦公園）、播磨灘では新舞子、白浜、家島、明石中崎、赤穂、竹野浜の8つの海水浴場が神戸新聞社によって「8大海水浴場」と歌われた²⁶。

伊勢湾では四日市に、かつて須賀浦、富田浜、霞ヶ浦、午起といった海水浴場が近鉄名古屋線沿線に位置していた。霞ヶ浦（現、羽津甲）には1924年、霞ヶ浦土地会社によって建設された霞ヶ浦遊園には海水浴場や温泉、シャワーを兼ねた噴水が設置された²⁷。

こうして海水浴はモダンなレジャーとなり、1929年7月15日の『読売新聞』では次のように記された。

けふ日曜の暑さを日帰りで海に避けやうとする人々で市内の各駅は朝からゴツタがへず騒ぎ、東京駅七時廿四分、八時十分発の横須賀行臨時列車は鮪詰の満員で其他湘南を通過する列車はどれもこれも満員である、逗子にたてた鉄道省自慢の「海の家」は午前十一時までに約千名のお客で賑はいその半数は例のモダン連である²⁸。

19世紀末から20世紀初頭における大都市近郊の海浜では、私鉄各社が海水浴場の開発を行い、新聞社が宣伝を担った。しかし、1940年代の戦時下では各地の海水

²⁵ 阪神電気鉄道（1985）119。香櫨園、甲子園海水浴場は1965年に閉鎖された。

²⁶ 山陽電気鉄道株式会社社史編集委員会（編）（1972）316-317。播磨工業地帯建設のため1957年から60年代にかけて堺浜、高砂、別府海水浴場が閉鎖された。

²⁷ 四日市市博物館（2022）コンビナート建設に伴って段階的に須賀浦、富田浜、霞ヶ浦、午起海水浴場は1960年代に閉鎖された。

²⁸ 『読売新聞』1929年7月15日夕刊、2面

浴場は一時的に閉鎖されることになる。1950年頃から再開されたものの、1960年代から始まる臨海工業地帯形成に伴う埋立によって、海水浴場の多くが消滅した。

第3節 大森海水浴場と京浜電気鉄道

日本における海浜観光は、海水浴だけではなく潮干狩り、鉱泉浴、花火などの様々なイベントを含んでいた。東京では官設鉄道大森停車場が開業した大森周辺が海浜観光地となり、海水浴や森ヶ崎の鉱泉浴、砂風呂などで目玉となった。1884年、実業家・久我邦太郎(出生年不明)は大森停車場西側に八景園という遊園地を作り、1890年初頭、八幡に脱衣所および荷物預り所のある簡素な海水浴場を設置した。八景園には1888年、料亭の三宜楼が開業した。1893年、八幡に料亭の伊勢源が開業し、料亭はさらに数を増やし、1910年頃には、魚栄、松浅、八幡楼、小松、汐見館などの料亭が軒を連ねた。1914年には、海水浴場業者による組合が設けられ、海開きの際には打ち上げ花火や海苔採り競争、スイカ流し、宝探しなどのイベントが開催された。埋立地には新聞社後援の納涼台も設置され、場内にはいくつもの売店があった。最盛期には大森停車場から海岸までの通りは人で溢れかえるようになり、海岸は人で埋め尽くされていたという。²⁹

京浜電気鉄道は大森地域の海浜観光化を進めた。1899年に六郷橋と川崎大師を結ぶ路線を開通させた大師電気鉄道は同年、京浜電気鉄道に改名し、1901年、六郷橋から八幡(現、大森海岸駅)を経由して大森停車場までの路線を開通させた。1902年刊行の『京浜遊覧案内』では、沿線の大森海水浴場や八幡海水浴場は東京の住民にとって最適な憩いの場であると紹介された。新聞記者の遅塚麗水(1867-1942)は『京浜遊覧案内』の冒頭で以下のように述べている。

郊外生活に適當の場所を相すれば、京浜鉄道沿線の地に勝るものなし、沿線の地勢をいへば、西北に一帶の丘陵を負ひ、東南に東京湾を控へたれば、空氣の清浄なることは言うまでもなく、夏は涼しく冬は暖かい … 殊に養生地としては海水浴は言うを俟たず、池上、羽田、森ヶ崎の鉱泉浴、大森の砂風呂の善く諸病に効驗あるは

遍く人の知るところ也。³⁰

伊勢源や汐見館、魚栄、松浅などは屈指の料亭であり、夏の間は非常に混雑していた³¹。東京から近い大森や大井では砂風呂を名物とする花街が形成され、大井と大森では組合は異なるものの、京浜国道(現、第一京浜)沿いにはほとんど一続きで開けていった。東京の花街は芸妓屋、料亭、待合からなる三業制度であるのに対して、大阪・京都は芸妓置屋と貸席の二業組織であった。大阪・京都の貸席では芸妓も娼妓も招くことができるが、東京の待合では娼妓を呼ぶことはできない。料亭は席料を取らないが、席料を主な収入源とした待合は、小規模で気配りのできる女将や女中がいることがよいとされた。³²

1920年代の大井花街には芸妓屋65件、芸妓総数245名、待合30軒、料亭39軒があり、大森海岸花街には芸妓屋約35軒、芸妓総数130名、料亭5軒、待合29軒があった。大森花街のほうが開けたのは早かったものの、大井花街が成立すると店の数は半減した。大森海岸の南に位置する大森新地という花街は、埋立地にあったゆえに広大な敷地を有し、日に日に新しい芸妓屋や待合が建設されていった【図3】。³³

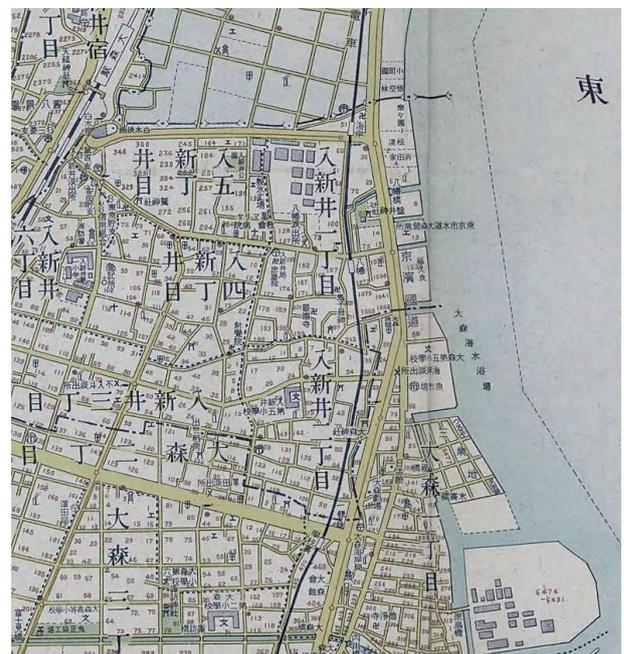


図3 1940年大森地図(大東京區分圖三十五區之内大森區詳細圖、東京地形社)

²⁹ 角田(1927)284-286。海開きに際したイベントは伊勢源などの料亭が開催することもあった。「大森伊勢源の海水開き」『東京朝日新聞』1903年7月3日朝刊4面(広告)では「例年の通り大森伊勢源にては来31日海水開きをなし女子の葉舟競漕打上花火等を催す由」と記載された。

³⁰ 『京浜遊覧案内』(1902)6-7。

³¹ 『京浜電気鉄道株式会社沿革』京浜電気鉄道(1902)23-24。

³² 松川(1932)7-8。

³³ 松川(1932)95-100。大森新地は現在、平和の森公園となっている。

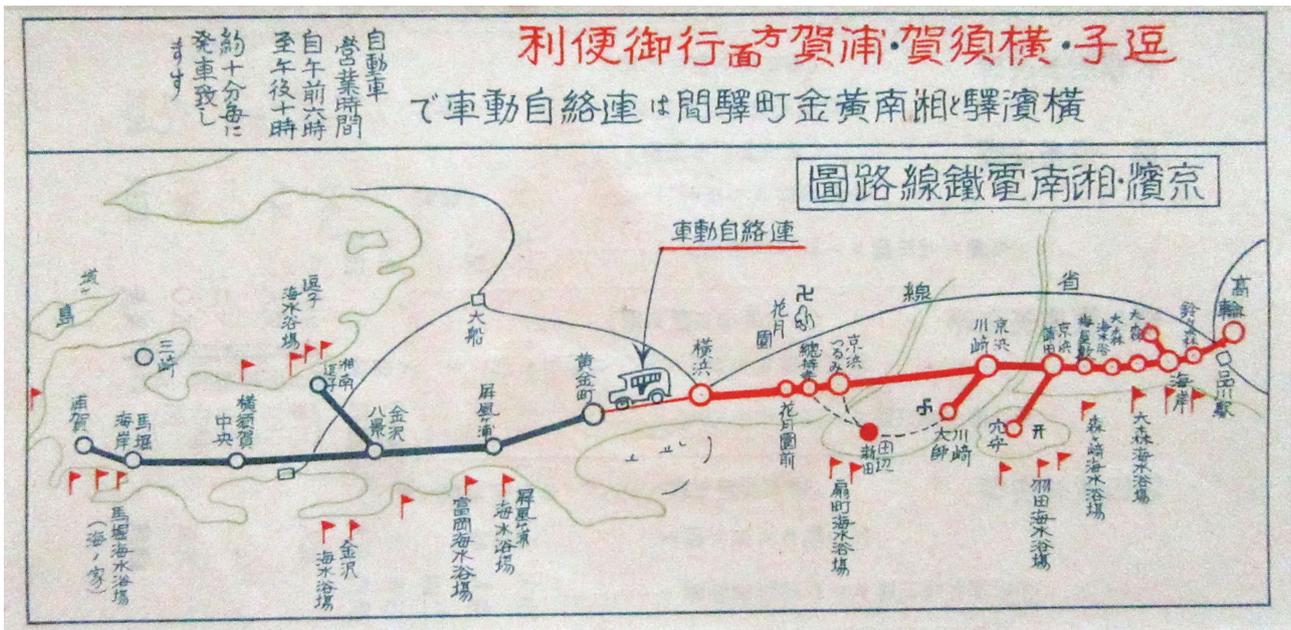


図4 京浜電鉄沿線海水浴場案内（1930年頃発行）

表2 京浜電鉄沿線海水浴場案内（1930年頃発行）

名称	後援	立地	入場料
鈴ヶ森海水浴場	東京毎日新聞	鈴ヶ森駅より東2丁	大人・小児 10 銭
大森八幡海水浴場	東京日日新聞社	大森八幡駅より東2丁	大人 20 銭 小児 10 銭 日日新聞読者 5 銭
大森海水浴場	東京毎夕新聞	大森海水浴場臨時停車駅より東1丁	大人・小児平日 5 銭 日曜・祭日 10 銭
都海水浴場		学校裏駅 ³⁴ より東北2丁余	大人 10 銭 小児 5 銭
森ヶ崎海水浴場	東京朝日新聞	梅屋敷駅より東18丁 自動車の便あり	大人 20 銭 小児 15 銭 朝日新聞読者 5 銭
羽田海水浴場	報知新聞、中野組	穴守駅より東北4丁	大人 25 銭 小児 15 銭
川崎大師プール		川崎大師駅より東4丁	大人 15 銭 小児 10 銭
扇町海水浴場	東京日日新聞	田辺新田駅より渡船 15 分	無料

※鈴ヶ森海水浴場を除いて、それぞれ高輪北品川からの割引往復運賃あり

※高輪北品川から扇町海水浴場への割引往復運賃（渡船料込）あり、日日新聞割引あり

1920年代から30年代には、路線図を記した多様なリーフレットが発行された【図4】。リーフレットの表紙には色鮮やかな海岸の風景が用いられ、内部には交通案内と料金が記載されていた【表2】。

古賀春江（1895-1933）の絵画『海』（1929年）において、工場を背景に水着姿の女性が描かれているように、海水浴場と工場が併存するのは当時の都市近郊の海岸では一

般的な風景であったと推測できる。品川や川崎には早くから工場が立ち、大森では1918年に東京瓦斯電気工業大森工場が操業を開始した。工場用地の不足から品川や川崎では埋立が進み、さらに、運河建設のための開削工事も進んでいった。1930年に完成した京浜国道は、大森地域の工業化をさらに加速させ、大森の工場数は1932年には700（従業員数2550人）だったのが、1940年には2550（従業員数37281人）にまで増えた。軍需工場

³⁴ 学校裏駅は現在の平和島駅に該当する。

が集まった大森は好景気にわき、1944年6月には穴守町に工場労働者向けの臨時的慰安施設を設けることが認可された³⁵。

工場の増加は大森地域の海水浴場の衰退につながっていった。森ヶ崎周辺は「大森辺に較らべては潮殊に澄明にして、京浜間の海水浴場としては随一なるべし³⁶」と言われていたように、最後まで海水浴場が残った。

然るに時代の進歩発展は、近年まで僅かに余喘を保っていた二、三の寥寥たる海水浴場も、海岸の埋立工事と豪壮なる料理店の櫛比によつて今は全く影を潜めてしまひ、僅かに大森一丁目附近の海岸に一カ所残存している現状である。

今では当時交通の関係等であり振はなかった森ヶ崎海水浴場が、夏の遊客を集めて区内最も盛んな海水浴場として、ひとり隆盛時の大森海岸海水浴の光景を偲ばせている³⁷。

1900年代初頭、品川湾では工場から廃水と埋立によって漁業が壊滅的な被害を受けていた³⁸。海水浴場の汚染も進行しており、大森については以下のように記されている。

品川よりは稍々東京と隔つて居るが其海水の汚きこと、海気の清新ならざることには余に品川と異なるところが無い。海水浴場の設があつて、賽日などには労働者の行くもの頗る多いが、過労と睡眠不足とで弱り切つている労働者が、海気浴海水浴の諸条件を無視して、矢鱈海水に浸り却つて健気を損ずるを想へば実に寒心に堪えざるものがある³⁹。

こうして、京浜工業地帯の拡大によって次第に大森の海水浴場は規模を縮小していった。

第4節 東京湾の埋立と海水浴場の消滅

京浜運河の計画は浅野総一郎(1848-1930)によって唱えられた。深川セメント工場の払下げを受け、セメント製造業で成功を収めた浅野は、欧米の工場や港湾の視察に向かい、日本にも海沿いの工業地帯が必要であると

³⁵ 大田区史下巻(1996)511-522。

³⁶ 『京浜遊覧案内』(1904)30。

³⁷ 東京市大森区(1939)1135。

³⁸ 朝倉・榎田(編)(1992)309。『東京近郊名所図会第7巻』東陽堂(1911)の復刻版

³⁹ 地理旅行案内社(1918)174。

認識した。帰国後、1899年、東京府に品川地先の埋立計画を出願したもの、認可されなかった。そこで、神奈川県に鶴見・川崎地先の埋立計画を出願したが、それでも許可保留となり、ようやく1913年に埋立計画の許可が下りた。田島村・町田村の海苔養殖者に対して1万円の補償金が支払われた。1912年、浅野が渋沢栄一および安田善次郎の支援を受けて設立した鶴見埋立組合は、鶴見埋築を経て、1920年、東京湾埋立となった。鶴見・川崎地先の埋立は1927年にはほぼ完成した⁴⁰。

浅野が鶴見・川崎の埋立を急いだ理由の一つには、深川の降灰問題があった。1911年2月10日の『読売新聞』には、「深川区住吉町所在の浅野セメント合資会社工場より飛散するセメント粉末が20有余の煙突より四散して同区38カ所(住民4万)及び日本橋京橋の一角に下降し、家屋および樹木を損傷し被害激甚なる事は既報の如し」という記事が掲載された。その後、1916年11月21日にも「降灰再燃」として区民からの不満が甚だ大きくなっていることや、280万の予算で川崎の新工場を建設中であると記載された⁴¹。こうした中で、1917年、川崎工場で操業が開始されると、再び降灰問題が起こった。「創設以来の懸案である除外装置を施さず大師町民は昼夜の別なく降灰に苦しめられて憤怒の郷土に達し臨時町会を開いて衛生上並びに農作物に全然無害なる事を明確に認められるまで機械の運転を即時中止せられたき意見書を提議⁴²」したと報道された。

開削した土砂で沿岸部を埋立てる計画も進んでいった。1927年、内務省港湾調査会は京浜運河の開削と埋立地計画を決定し、翌年、京浜運河(株)が大井・入新井・大森・羽田に対して計画への賛否を諮った。これに対して1928年6月22日、大森の海苔養殖業者・鳴島音松(当時26歳)が天皇に直訴を行った。鳴島は請願令違反と皇居侵入罪で起訴され、巢鴨刑務所に収監されたが、翌年11月10日の即位大礼の恩赦令によって帰宅した。各種のメディアで取り上げられたこの事件のインパクトは非常に大きく、運河開削工事は、1937年まで中断された。1937年、東京府によって第二次運河開削工事が進められた際には、漁業補償および保護救済に関する懇談会が漁業組合との間で設けられた。交渉は1937年12月末か1939年3月まで行われ、同年6月から補償金の公布が始まった。工事は再開されたが、

⁴⁰ 渡邊(2007)104-113。

⁴¹ 『読売新聞』1916年11月21日朝刊、5面

⁴² 『東京朝日新聞』1923年4月3日夕刊、2面

戦局の悪化により 1943 年 3 月に再び中断された⁴³。

戦時中、大森地域には多くの軍需工場が設けられた。料亭は休業となり、一部は工場労働者の寮とされた。空襲で大森地域の建物は被害を受けたが、焼け残った建物の中でも大井海岸町の料亭・小町園（図 3 の北部）が最初の特殊慰安所として選ばれた。小町園の主人は嫌がったものの、警視庁の斡旋で殊慰安施設協会 RAA（Recreation & Amusement Association）が借り入れることとなった。占領軍による性暴力予防を目的として RAA が設置した特殊慰安所には、政府から 1 億円が投じられた。8 月 29 日から『朝日新聞』や『毎日新聞』などに「女性事務員募集」といった広告が掲載され、宿舍・被服・食料支給という条件で 18 歳から 25 歳までの女性が対象となった。5000 人を目標としていたが 1 万人以上の応募があった⁴⁴。小町園に続いて、河庄、花月、見晴、波満側、蜂乃喜、やなぎ、乙女など 11 カ所が開園した。大森地域が慰安所選ばれたのは、占領軍が着陸する厚木飛行場と東京を結ぶ京浜国道に位置したためである⁴⁵。1945 年 8 月 30 日、小町園には「兵隊たちが、ひきもきらず押しかけてきて、早くも収拾のつかないような混乱が起き、…おしかけてくる兵隊たちの相手にだされ、はじめて逃げだすものがあらわれた⁴⁶」という。特殊慰安所は立川や三鷹、福生、熱海、箱根などにも設置されたが、アメリカの宗教団体や婦人団体からの批判を受けて、1946 年 3 月 26 日に廃止された。

戦後、東京湾では様々な問題が各地で顕在化した。1949 年、東京都は森ヶ崎に汚水処理施設を建設する計画を立てた。これは、大田区・品川区・目黒区・世田谷



写真 4 森ヶ崎公園（2025 年 5 月撮影）

⁴³ 東京都内湾漁業興亡史編集委員会（1971）744-756。

⁴⁴ 橋本（1958）35-36。

⁴⁵ ドウス（1979）53。

⁴⁶ 橋本（1958）51。

区・渋谷区・杉並区からの汚水を処理する施設とされた。森ヶ崎近隣の住民は建設反対運動を起し、1949 年 6 月 8 日、都市計画東京地方委員会に反対陳述を行ったが、1953 年に事業決定が告示され、1957 年から港湾埋立工事と並行して建設工事が始まった【写真 4】。



写真 5 大森漁業組合記念碑（2025 年 3 月撮影）

1954 年 3 月 5 日、東京ガス大森工場では重油輸送管が故障し 20 トンの重油が海に流出した。重油は海苔網や支柱竹、作業船、ベカ（小型船）などに付着し甚大な被害を出した。漁業組合は工場に補償を求めたが、交渉は難航し、3 月 26 日に補償金 1100 万円で和解が成立した⁴⁸。

こうした問題が起こる中で、東京湾の埋立計画は 1957 年に発表され、1960 年、東京都内湾漁業対策審議会が発足した。東京都と漁業組合が交渉を重ねた結果、1962 年 12 月 3 日、東京語沿岸部の漁業組合は漁業補償協定書に調印し、これによって大森地域の海苔養殖業は事実上廃止となった。17 組合 4190 名に対して、補償総額 330 億円（海苔関連補償費 238 億 5872 万円）が支払われることとなった⁴⁹。

1965 年、9 月 29 日、大森漁業組合が解散し、1967 年 12 月 7 日、大森漁業共同組合事務所跡地で記念碑の除幕式が行われた【写真 5】。事務所跡地は売却する必要があったが、大田区に譲渡され、児童館と小公園となった。大森漁業共同組合専務理事の田中裕蔵撰書による記念碑の後半部分には以下のようにある。

百年にわたる永い漁業史は大森漁業共同組合を縦糸とし、素朴な漁民生活を横糸として織りなされたものであ

⁴⁷ 大森漁業史刊行会（1973）679-681。

⁴⁸ 大森漁業史刊行会（1973）674-675。

⁴⁹ 大田区史（1992）

る。そしてこれからも、永久にこの輝かしい史実は編まれてゆくはずのものであったが、1964年はずも東京都湾埋め立て事業により、国及び東京都の発展に寄与するために不本意ながら、自らの漁業権を全面放棄することにより大森漁業史は終焉することになった。それはまた祖先が築き上げて来た貴重な技術と、独特な精神風土の終焉でもあるのだろうか。

漁業権放棄後、大森地域では海苔乾燥場が町工場に転用された。戦時中に軍需工場で働いた経験のあった若い人々はプレスや旋盤の使用方法に慣れていて、町工場の経営において利点となった。町が開けるにつれて不動産収入が増え、事業を起こす人もいれば、補償金をギャンブルなどで使いつくす人もいた⁵⁰。品川では観光および釣りブームに乗って遊船業に従事した人も多かったが、実際には埋立と汚染によって、東京湾内に漁場を見出すことはできなかった。当時は自家用車が普及し始めたため、船の利用者も減少していったのである⁵¹。

第5節 ふるさとの海としての再生

東京湾埋立事業は1960年代から1970年代にかけて急速に進み、埋立面積は水面面積の20%に相当する約25,000haとなった。この時期、日本各地で公害が深刻化し、東京湾では1970年代には水質汚染がピークに達し、連日のようにヘドロや赤潮に関するニュースが報道された⁵²。こうした中で東京湾に海上公園を設置する計画が立ち上がった。1959年の時点で、東京湾の海岸線延長680kmに対して立ち入ることができる海岸線延長は146kmであった。東京湾と同規模のサンフランシスコ湾（海岸線延長442km、立入可能水際線160km）を目標として、立入可能水際線を海岸線延長の40%とすること、未使用の埋立地2500ha（公共1200ha）や工場移転跡地を可能な限り公園・緑地として再利用することが環境庁によって提示された⁵³。

「かつて都民生活に海が果たしてきた役割をあらためて見直し、都民が海や自然とふれあい、スポーツやレクリエーションを楽しめる場として、東京の埋立地に公園を整備していく⁵⁴」として海上公園（海浜公園、ふ頭公園、緑道公園）の建設が決まった。1975年にお台場海浜公園や晴海ふ頭公園が開園し、1978年に大井ふ頭中央海

浜公園が開園した。大森では、2007年、人工ビーチを持つ大森ふるさとの浜辺公園【写真6】が区立公園として開園し、2025年の海の森公園の開園まで40公園が開園した。お台場海浜公園や大井ふ頭中央海浜公園などは「ウォーターフロント」と呼ばれ、都心のレジャー施設として注目を集めた⁵⁵。

また、千葉県側では日本最初の人工ビーチが作られた。1976年、東京湾埋立地の稲毛に1200mのいなげの浜が誕生し、1979年、東京湾埋立地の幕張に全国一長い人工ビーチ、1820mの幕張の浜が完成した【写真7】。人工ビーチは、埋立地の両端から延びる突堤の間の海底に砂156万m³を流し込んで作られた。護岸工事を含めて総工費は36億円であった⁵⁶。東京湾の遊泳可能な海として観光地となったが、2010年頃から海難事故が起り始めた。特に2018年以降、突堤付近で水難事故が発生したため、遊泳禁止となった。



写真6 大森ふるさとの浜辺公園（2025年3月撮影）



写真7 幕張海浜公園（2025年6月撮影）

⁵⁰ 大森漁業史刊行会（1973）735.

⁵¹ 東京都品川区（1974）992.

⁵² 『朝日新聞』1974年12月25日朝刊、18面など

⁵³ 環境庁企画部調整局（編）（1989）34-40.

⁵⁴ 港湾局ウェブサイト

⁵⁵ 『読売新聞』1987年4月8日夕刊、8面

⁵⁶ 『読売新聞』1979年3月10日夕刊、10面

東京湾に新たに誕生した人工ビーチは原則的に遊泳禁止とされてきた。2001年に結成されたNPO法人「ふるさと東京を考える実行委員会」は、東京湾の環境改善および海水浴場復活に努めてきた⁵⁷。2013年、東京都が顔をつけないという条件つきで人工干潟が広がる葛西臨海公園で海水浴を解禁した⁵⁸。お台場では2014年に限定的に海水浴が解禁された。

東京湾埋立地の海浜公園化や人工ビーチの設置は東京湾の再生であるが、海浜公園は観光地施設というよりも、地域住民の憩いの場を想定して建設されたものである。人工ビーチは、大森ふるさとの浜辺公園という言葉が象徴するように、高度経済成長で失われたのどかな景観を取り戻そうとする試みに見える。東京で用いられる「ふるさと」あるいは「郷土」は、特に昭和30年代（1955-1965）を指すことが多い。1990年代に建設された東京都の区立の郷土資料館やふるさと資料館では、「昭和レトロ」と呼ばれる昭和30年代のちゃぶ台にテレビのある茶の間の風景が再現されている。東京の生活様式は高度経済成長期に洋式化したため、昭和30年代を境に、ちゃぶ台からダイニングテーブルへ移行し、茶の間の風景は消滅していった。21世紀に入り、「ふるさと」という共通の幻想として想起できるものとして茶の間のちゃぶ台が選ばれた⁵⁹。東京湾の人工ビーチによる海浜景観の再生は、郷土資料館における茶の間の再現展示に似ている。消滅から50年以上を経て人工ビーチとして再生した大森の浜辺は波の穏やかな美しい砂浜ではあるものの、潮の香りがなく、遊泳禁止などの様々な規制があり、鑑賞専用の景観、あるいは、野外の展示物のようである。

第6節 アトラクション型の海浜観光地の行方

大森地域では、第一京浜沿いの料亭は高層マンション群となり【写真8】、海浜公園以外では概ね宅地化した。八景園跡地が20世紀初頭に既に宅地化したように、都心へのアクセスのよい駅周辺は宅地開発に適していた。これは浜寺や香櫨園が高級住宅街と変容した事例と共通する。このような海水浴場消滅後の宅地化という現象は、都市近郊のアトラクション型の海浜観光地が辿る別のサイクルを示している。東京湾や大阪湾の海浜観光地の衰退が、TALCにおけるリゾート観光の衰退理由として挙げられる収容人数超過や施設の老朽化や観光客の嗜好の変化や休暇制度の変化が直接的な理由ではない。直接的

⁵⁷ NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会ウェブサイト

⁵⁸ 『読売新聞』朝刊、2015年5月1日、35面

⁵⁹ 高山（2024）

な衰退の理由は埋立であり、官設的には宅地化による娯楽施設としての非日常性の喪失と、工場からの排水や煤煙による環境汚染であった。



写真8 大森海岸駅から見た第一京浜（2025年9月撮影）
右側にかつて料亭が軒を連ねた

その後、東京湾にはテーマパークが誕生した。東京ディズニーランド開園（1983年）や横浜・八景島シーパラダイス開園（1993年）は、コニーアイランドが海浜リゾート地から遊園地へ変貌した流れと類似する。コニーアイランドは「浅草と大磯を一緒にした様な処で避暑地、遊び場、見世物処である」と紹介されたように、戦前の日本のレジャー施設はコニーアイランドを一つの目標としてきた。東京ディズニーランドは開園当時、「レジャー施設」や「遊園地」と記されたが、テーマパークという言葉が誕生して以来、昭和の遊園地とは一線を画することが共通認識となった。そして、2000年、東京ディズニーランドは東京ディズニーリゾートへと改名した。さらに、八景島の「パラダイス」という名称を考慮すると、東京湾の海浜観光がリゾート型とアトラクション型を揺れ動く様子、すなわち、パラダイスと大衆性の間を揺れ動く様子がうかがえる。

これは、明治以降の海浜観光の展開を彷彿とさせる。明治以降の海浜観光は従来の潮湯治や茶屋遊びといった庶民的な系統と、西洋から輸入されたレジャーやリゾートという高尚な系統を行き来しながら展開していった。大磯海水浴場に端を発する近代海水浴場は西洋的な海浜リゾート型の導入であったが、大森地域の海水浴場は大磯の成功を参考としつつも、海浜アトラクション型として庶民的な施設が作られていった。逗子海岸に設置された海の家について、西洋帰りの東京鉄道局運輸課長・伊庭彰一（出生年不明）はイギリスの海浜リゾート地を意

⁶⁰ 『東京朝日新聞』1909年6月27日朝刊、6面

識して、日本にリゾートを普及させるために長時間滞在できるような家族向けの施設が必要であると述べたが⁶¹、海の家は長期滞在型の高級リゾート施設というよりも、庶民的な施設として広がっていった。

戦後、海の家は山の家や保養所と同様に企業の福利厚生施設として使われることになった。関東では、鎌倉、逗子、葉山、鵜沼、保田などに海の家があり、各企業が所有するものと、借り入れているものがあつた。こうした所有形態が1997年のいわゆる「海の家事件」（海の家利用料を名目とした総会屋への利益供与）につながり、「海の家＝反社会的勢力」というネガティブなイメージが作られた。また、海浜地域以外でも1987年の総合保養地域整備法（リゾート法）によって成立したリゾート施設の多くが苦境に陥っていることを見れば、リゾート観光地を維持する難しさがわかる。

東京湾全体で見れば、ほとんどの海水浴場が消滅したものの、海浜公園として整備され、テーマパークやショッピングモールが建設されるなど、公共空間としては再編されていると言える。TALCは観光地としての衰退と再生のモデルを提示したが、少なくとも交通アクセスのよいアトラクション型の海浜観光地においては、観光地の衰退は地域の衰退を意味するわけではない。この点が、ブラックプールやリアルなど、かつて栄えたイギリスの海浜リゾート地が見捨てられた町と表現される事例⁶²と異なる。東京湾が公共空間として再生した大きな理由の一つは、東京の資本力に求められるだろう。成立して間もない海浜公園が観光資源としてどのような価値を持つかは今のところ不明である。海浜観光地の衰退と再生については、より多くの事例から検討していく必要がある。

本研究は、「令和7年度アジア研究所研究プロジェクト研究」の助成を受けたものである。

参考文献

- 朝倉誠軒（1922）『大磯案内』三宅書店
- 朝倉治彦・植田満文（編）（1992）『明治東京名所図会下巻』東京堂出版
- 荒木利一郎（1926）『浜寺海水浴二十年史』大阪毎日新聞社
- 伊庭彰一（1926）「海水浴と「海の家」に就て」『旅』6（8）：pp. 10-12
- 今井良広・三宅正弘（2024）「「阪神間」の海水浴場（1905-1964）についての一考察」『武庫川女子大学附属総合ミュージアム紀要・年報』5：pp. 5-31
- 大田区史編さん委員会（1992）『大田区史』
- 大森漁業史刊行会（1973）『大森漁業史』大森漁業協同組合
- 環境庁企画部調整局（編）（1989）『東京湾・その保全と創造に向けて：東京湾地域の開発と環境保全に関する基本的方策について 中間取りまとめ』
- キャノン、ジョン・F（1988）『コニー・アイランド：遊園地が語るアメリカ文化』開文社
- 京浜電気鉄道（1902）『京浜遊覧案内』
- 京浜電気鉄道（1902）『京浜電気鉄道株式会社沿革』
- 高山陽子（2024）「ちゃぶ台と昭和ノスタルジア」『国際関係紀要』（亜細亜大学）33：pp. 29-58
- 地理旅行案内（編）（1918）『全国遊療地名勝古蹟案内』日本書院
- 角田長蔵（編）（1927）『入新井町誌』入新井町誌編纂部
- 東京都品川区（1974）『品川区史 通史編 下巻』
- 東京市大森区（1939）『大森区史』
- 東京都内湾漁業興亡史編集委員会（編）（1971）『東京都内湾漁業興亡史』
- 村松梢風（1944）『婦道太平記』万里閣
- 東京都内湾漁業興亡史刊行会（1971）『東京都内湾漁業興亡史』
- ドウス昌代（1979）『敗者の贈物：国策慰安婦をめぐる占領下秘史』講談社
- 橋本嘉夫（1958）『百億円の売春市場』彩光新社
- 服部図南（編）（1903）『浜寺公園誌』今井文岳堂
- 阪神電気鉄道（1985）『阪神電気鉄道八十年史』
- 山陽電気鉄道株式会社社史編集委員会（編）（1972）『山陽電気鉄道65年史』
- 松川二郎（1932）『三都花街めぐり』誠文堂
- 四日市市博物館（編）（2022）『四日市のまちかど：昭和30年代を中心に』

⁶¹ 伊庭（1926）

⁶² Britain's seaside ruins <https://www.bbc.com/culture/article/20150609-britains-seaside-ruins>

- 渡邊恵一 (2007) 「京浜工業地帯の埋立」 橋川武郎・粕谷誠 (編) 『日本不動産業史』 名古屋大学出版会 : pp. 103-117
- Agarwal, S. (1999) “*Restructuring and Local Economic Development: In Implications for Seaside Resort Regeneration in Southwest Britain*” *Tourism Management*, 20: pp.511-522
- Agarwal, S. (2002) “*Restructuring Seaside Tourism: The Resort Lifecycle*” *Annals of Tourism Research*, 29(1): pp. 25-55
- Agarwal, S. (2006) “*Coastal Resort Restructuring and the TALC*” R. Butler (ed.) *The Tourism Area Life Cycle*, Vol. 2: Conceptual and Theoretical Issues, Channel View Publications: pp. 201-218
- Andriotis, K. (2006) “*Host, Guests and Politics: Coastal Resorts Morphological Change*” *Annals of Tourism Research*, 33(4): pp. 1078-1098
- Butler, R. (1980) “*The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution: Implications for Management of Resources*” *Canadian Geographer / Le Géographe Canadien*, 24: pp. 5-12
- Butler, R. (ed.) (2006) *The Tourism Area Life Cycle Vol. 1: Applications and Modifications*, Channel View Publications.
- Cooper, C. and S. Jackson (1989) “*Destinations Life Cycle: The Isle of Man Case Study*” *Annals of Tourism Research*, 16(3): pp. 377-398
- Cooper, C. (1997) “*Parameters and Indicators of the Decline of the British Seaside Resort*” G. Shaw and A. Williams (eds.) *The Rise and Fall of British Coastal Resorts: Cultural and Economic Perspectives*, Mansell: pp. 79-101
- Cohen, E. (2008) “*The Tsunami Waves and the Paradisiac Cycle: The Changing Image of the Andaman Coastal Region of Thailand*” *Tourism Analysis*, 13: pp. 221-232
- Farr, M. (2018) “*Decline Beside the Seaside: British Seaside Resorts and Declinism*” D. Harrison & R. Sharpley (eds.) *Mass Tourism in Small World*, Cab Intl: pp. 105-117
- Gale, T. (2007) “*The Problems and Dilemmas of Northern European Post-Mature Coastal Tourism Resorts*” S. Agarwal & G. Shaw (eds.) *Management Coastal Tourism Resorts: Global Perspective*, Channel View Publications: pp. 36-54
- Lagiewski, R. (2006) “*The Applications of the TALC Model: A Literature Survey*” Butler, Richard (ed.) *The Tourism Area Life Cycle Vol. 1: Applications and Modifications*, Channel View Publications: pp. 27-50
- Priestley, G, and L. Mundet (1998) “*The Post-Stagnation Phase of the Resort Cycle*” *Annals of Tourism Research*, 25(1): pp. 85-111
- Shaw G. and A. Williams (eds.) *The Rise and Fall of British Coastal Resorts: Cultural and Economic Perspectives*, Mansell
- Smith, A. R. (1992) “*Beach Resort Evolution: Implications for Planning*” *Annals of Tourism Research*, 19: pp. 304-322
- Smith, A. R. and J. C. Henderson (2008) “*Integrated Beach Resorts, Informal Tourism Commerce and the 2004 Tsunami: Laguna Phuket in Thailand*” *International Journal of Tourism Research*, 10: pp. 271-282
- Urry, J. (1990) *The Tourist Gaze*, SAGE Publications (ジョン・アーリ (1995) 『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』 法政大学出版局)
- Westerhausen, K. (2002) *Beyond the Beach: An Ethnography of Modern Travellers in Asia*, White Lotus.

ウェブサイト

- 愛知県常滑市公式観光サイト <https://www.tokoname-kankou.net/spot/detail/23/> (2025年8月26日閲覧)
- 岡山観光WEB <https://www.okayama-kanko.jp/> (2025年8月26日閲覧)
- 港湾局ウェブサイト <https://www.kouwan.metro.tokyo> (2025年9月5日閲覧)
- NPO 法人ふるさと東京を考える実行委員会 <http://www.furusato-tokyo.org> (2025年8月18日閲覧)
- BBC ウェブサイト Britain's seaside ruins <https://www.bbc.com/culture/article/20150609-britains-seaside-ruins> (2025年9月18日閲覧)

新聞記事

- 「大森伊勢源の海水開き」『東京朝日新聞』1903年7月3日朝刊、4面 (広告)
- 藪野棕十「世界見物」『東京朝日新聞』1909年6月27日朝刊、6面
- 「降灰再燃 深川のセメント会社問題 区民の態度強硬」『読売新聞』1916年11月21日朝刊、5面
- 「恐るべき灰毒 浅野セメントの煙害と深川区民」『読売新聞』1911年2月10日朝刊、3面

- 「降灰問題で川崎兆民の憤怒」『東京朝日新聞』1923年4月3日夕刊、2面
- 「ドツと押し出した海へ！山へ！の客」『読売新聞』1929年7月15日夕刊、2面
- 「赤潮発生は日常化」『朝日新聞』1974年12月25日朝刊、18面
- 「全国一の人工海浜 潮干狩りも可能に 千葉・幕張にオープン」『読売新聞』1979年3月10日夕刊、10面
- 「ウォーターフロント再生 いま「水辺」が新しい 楽しいスポット身近に」『読売新聞』1987年4月8日夕刊、8面
- 「人工海浜 一体活用 レジャー用途拡大目指す 千葉市検討」『読売新聞』2012年7月24日朝刊、35面
- 「東京再発見！（1）水質改善 NPOが汗 葛西に海水浴場」『読売新聞』2015年5月1日朝刊、35面